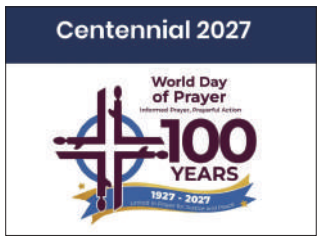
# NCC HEADLINE ［日本キリスト教協議会 最新情報］ 毎月21日付に掲載

## 100周年を迎える世界祈祷日 「正義と平和 心をひとつに」




毎年３月第１金曜日に世界中で守られる「世界祈祷日」は、多様な教派のキリスト者女性による、祈りを通した世界的な運動です。その源流は、1887年、アメリカの女性たちが周縁化されている人々を覚えて始めた祈りにさかのぼります。その後、各地で行われていた祈りの運動が一つに結ばれ、1927年に「世界祈祷日」として歩み始めました。2027年には100周年を迎えます。

「世界祈祷日」には、世界中の教会で同じ式文を用いて祈りがささげられます。式文は、それぞれの国の女性たちが持ち回りで担当し、聖書を共に読み、自分たちの国の現実や女性たちが置かれている状況を分かち合いながら、祈りの言葉を紡いでいきます。日本ではNCC女性委員会が式文や資料を翻訳し、全国に呼びかけてきました。

2027年のテーマは「正義と平和 心をひとつに」。「ハンナの祈り」から「マリアの賛歌」へと、100年の女性たちの物語が一枚の大きなタペストリーのように織り込まれています。

国際委員会（本部・ニューヨーク）がまとめた歴史資料には、３人の日本人の名前があります。1950年、日本が最初に式文作成国となった時の河井道氏（日本YWCA総幹事／恵泉女学園創立者／日本基督教団信徒）。1974年式文作成の責任を担った奥田道子氏（NCC女性委員会委員長／日本基督教団信徒）。そして、2003年から2007年まで世界祈祷日国際委員会アジア実行委員を務めた松浦順子氏（NCC女性委員会委員長／日本聖公会信徒）です。100周年の子ども式文には「あなたにとってエリサベトは誰ですか？」という問いがあります。こうした先達は、私たちにとって大切な「エリサベト」たちです。

一方、忘れてはならない歴史もあります。日本の植民地支配下にあった朝鮮では1941年、朝鮮語の世界祈祷日プログラムを配布したアメリカ人宣教師と４人の女性が、「不穏文書」を配布したとして罪に問われました。これは、前女性委員会幹事の山口明子氏が掘り起こした過去の事実です。私たちは、植民地支配と侵略戦争の過去への反省と謝罪に真摯に取り組み続けていきたいと思います。

世界祈祷日は、「知ることから祈りへ」「祈りから行動へ」と私たちを押し出してきました。先達の祈りに守られ、励まされてきた私たちもまた、いつの日か誰かの「エリサベト」となり、この祈りを次の世代へ手渡していきたい。そして100周年を、過去を記憶し、正義と平和への新たな道を歩み始める時としたいと願っています。

2027年の式文の注文など、詳しくは11月末以降、NCC女性委員会 世界祈祷日事務所のブログをご覧ください。（https://cloister171.blog.fc2.com/）

**（北村恵子 きたむら・けいこ＝NCC女性委員会委員長、日本キリスト教婦人矯風会）**

### 【主催・共催集会】

＊詳細はNCCホームページのニュースをご覧ください。Facebookでも案内しています。

■第50回ウクライナを覚えて平和を祈るキリスト者祈祷会 10月24日（土）後8時～8時45分、オンライン。日本カトリックいのち・平和・人権委員会、平和を実現するキリスト者ネット、NCCの共催。

■10.29狭山市民集会・キリスト者前段集会 10月29日（木）前10時半～12時 日比谷図書文化館大ホール（東京都千代田区）。呼びかけ 日本キリスト教協議会、部落問題に取り組むキリスト教連帯会議、日本基督教団部落解放センター。13時から日本消防会館ニッショーホールで開かれる狭山市民集会に合流。

■第14回NCC-URM日韓協議会 11月4日（水）～6日（金） 香川県高松市内。主催 NCC都市農村宣教委員会

■障がい者週間の集い 11月14日（土）前11時～後3時 日本キリスト教会館4階会議室（東京都新宿区）とオンライン。主催 NCC「障害者」と教会問題委員会

■公開証言集会「いま、私たちの周りで起こっていること・国旗損壊罪、日の丸君が代強制・皇室典範改定」 11月26日（木）後7時～9時 オンライン 主催 靖国神社問題委員会

### 【声明】

■法務大臣、出入国管理庁長官宛「在留許可等手数料の大幅引き上げと永住許可制度の厳格化に抗議し、見直しを求めます」10月4日 議長・総幹事・在日外国人の人権委員会

■内閣総理大臣宛「靖国神社秋季例大祭に首相閣僚は真榊奉納・参拝をしないでください」10月5日 靖国神社問題委員会

### 【委員会など】

■10月24日（土） ジェンダー正義ワーキンググループ
■11月2日（月） 靖国神社問題委員会
■11月11日（水）～12日（木） 女性委員会一泊研修会
■11月13日（金） 第11回常議員会
■11月20日（金） 在日外国人の人権委員会

NCC ホームページ https://ncc-j.org/ Facebook 日本キリスト教協議会 TEL 03-6302-1919 FAX03-6302-1920 Email general@ncc-j.org
郵便振替 00180-4-75788 加入者名 日本キリスト教協議会

## 「正義ある平和」を目指して 国際エキュメニカル平和会議開催

９月９日から13日まで、韓国・ソウルで、韓国キリスト教教会協議会（NCCK）、アジアキリスト教協議会（CCA）、世界教会協議会（WCC）の共催による国際エキュメニカル平和会議が開催されました。世界各地の教会、エキュメニカル団体から250人を超える人々が集い（日本から６名参加）、パレスチナ、ウクライナ、フィリピン、スリランカ、スーダンなど、それぞれの地で続く戦争や暴力、人権侵害の現実に耳を傾けました。

会議の中心に置かれたのは「正義ある平和（Just Peace）」です。2011年にジャマイカで開かれた国際エキュメニカル平和会議から15年。世界ではむしろ軍事化と軍拡が進み、核戦争の危険も高まっています。最終日に採択された「正義ある平和の宣言」では、戦争は神の意志に反することを改めて確認し、平和とは単に戦争がないことではなく、正義に根ざし、人々の日々の暮らしの中に実現されるものであることを明らかにしました。NCCホームページに翻訳を挙げていますのでご覧ください。

ソウルでこの会議が開かれたことには大きな意味があります。朝鮮戦争は73年を経た今も終結せず、「休戦」の状態が続いています。宣言は、南北が相互尊重に基づいて平和的に共存する道を求め、対話の回復、軍事的緊張の緩和、休戦協定を平和協定へと転換することを呼びかけました。会議中には京畿道坡州（パジュ）のDMZ（非武装地帯）を訪ねる平和巡礼も行われました。遠くに北朝鮮を望むチャンサン展望台では、参加者が「平和のワルツ（Peace Waltz）」を共に踊り、巡礼を締めくくりました。

今年は、1986年にスイス・グリオンで南北のキリスト者が歴史的な出会いを果たしてから40年でもあります。筆者は朝鮮半島をめぐるセッションで、日本の教会の立場から応答しました。植民地支配の歴史を負う日本に生きる私たちにとって、朝鮮半島の平和は決して「隣国の問題」ではありません。日本自身が再び軍事化への道を進む今、問われているのは、平和について語るだけでなく、平和をつくる者となることです。

宣言は最後に、「これは終わりではない」と記しています。祈り、悔い改め、連帯し、具体的に行動することへの招きです。ソウルから持ち帰ったこの課題を、日本の教会の歩みへとつないでいきたいと思います。

**（大嶋果織 おおしま・かおり＝NCC総幹事、日本基督教団）**


北朝鮮を望む丘で平和のダンスを踊る参加者たち

## 課題を共に担う プログラム委員会が開催されました！

NCC教育部は９月26日にプログラム委員会を開催しました。プログラム委員会は、加盟教派・団体に所属する委員によって構成されています。教会教育、平和教育、人権教育などについて情報交換を行い、それぞれの課題を分かち合いながら、集会や学習会などの企画・運営に取り組んでいます。９人の委員の中には牧師も信徒もいますが、立場に関わらず、お互いを名前で呼び合う、和やかな関係が築かれています。

今回は委員会に先立って、「JOCS（日本キリスト教海外医療協力会）を知る会」を開催しました。会では、JOCSスタッフの竹内里佳氏から、バングラデシュで、障がいのある子どもたちの養育を支援する「JOYJOYプロジェクト」についてお話しを伺いました。「JOYJOYプロジェクト」は、今年の平和のきずな献金の献金先の一つです。

竹内氏は、貧しく、療育を受ける機会が限られている子どもたちを迎えるデイケアや家庭訪問、さらに親たちの自助グループの様子を、多くの写真とともに紹介してくださいました。特に心に残ったのは、障がいのある子どもに対する偏見が強い地域で、子どもたちが教育や療育を受ける機会に恵まれず、顧みられない存在となっていたこと、そして家族もまた心を痛めながら孤立していたという現実です。そのような状況の中で、JOCSから派遣されている岩本直美ワーカーのリーダーシップにより、親子に笑顔が生まれていることに大きな希望を感じました。全国の教会やキリスト教学校等から寄せられた祈りと献金が、このような働きのために用いられている恵みに、あらためて感謝しました。

報告会に続いて、久しぶりに対面で委員会を開催し、今年度の活動を振り返るとともに、各教派の課題や今後の計画について話し合いました。その中で、「こども性暴力防止法（『学校設置者等及び民間教育保育等事業者による児童対象性暴力の防止等のための措置に関する法律』）」の施行を見据え、教会においてもガイドラインを整備する必要があるのではないかとの声があるが、ほかの教派ではどうしているのかという投げかけがありました。まずは勉強会から始める動きがあり、今後、情報を共有しながら、教育部も取り組んでいくことになりました。

また、「尊厳」について学びたいという提案も出されました。「尊厳」は最近よく耳にしますが、具体的にどういうことなのか実感が伴いません。そこで、今後、アジア・キリスト教教育基金（ACEF）が主催する「尊厳カフェ」に参加しながら、学びを深める機会を作ることになりました。日時が決まりましたらあらためてご案内いたします。ご一緒に理解を深めていきましょう。**（河内理恵 かわち・りえ＝日本バプテスト連盟／NCC教育部主事）**

### 【理事会の予定】

■11月6日（金） 第8回常任理事会
■11月19日（木） 第6回理事会

NCC 教育部 ホームページ https://nccj-edu.jimdofree.com/ TEL/FAX 03-3203-0731 Email nccjedu@gmail.com
郵便振替 00150-8-98713 加入者名 日本キリスト教協議会教育部

NCC HEADLINE ［日本キリスト教協議会 最新情報］

## 支援を待つ人のもとへ 熊本でつなぐ、一人ひとりの暮らし

今、私はこの記事を熊本で書いています。ACTジャパンフォーラムが今回支援している、メンバー団体のCWS Japanと熊本YWCAが連携した支援活動に参加するためです。私たちは、高齢者や外国人など、災害時に困難を抱えやすい人々のもとを訪ねています。

支援先の一つは、高齢者が暮らす小さな地域の集まりです。ガスなどのインフラが復旧していない中でも、避難所に移らず、自宅で避難生活を続けています。自宅にいるからといって、日常を取り戻せているわけではありません。水や食料、生活用品を届けるとともに、家屋内の片付けを手伝い、暮らしを立て直すために必要な支援を一緒に確かめています。

もう一つ、見えにくい困難を抱えているのが、外国人の被災者です。被害の大きかった八代市、宇城市、宇土市などには、特定技能や技能実習の在留資格で、主に農業に従事する外国人が4千人以上います。とりわけ技能実習生の中には、まだ日本語を十分に理解できず、被災後の生活に必要な情報や支援制度を知ることが難しい人が少なくありません。

雇用する側の日本人も被災しているケースが多く、頼りにしたい相手にも余裕がない状況です。言葉の壁に加え、地域とのつながりが限られていれば、困りごとを誰に伝えればよいのかさえ分かりません。支援の窓口を設けるだけでは、こうした人々に十分に届かないのです。

そこで、県が開く外国人向けの相談会や、地域で外国人を支えてきた人々のつてをたどり、被災者との接点を探しています。現在は、ベトナム、カンボジア、インドネシアから来た技能実習生たちとつながり、支援を始めています。一人ひとりの状況を聞き取り、必要な助けにつなぐ地道な取り組みです。支援を求める声が上がるのを待たず、暮らしの場へ足を運ぶことを心がけています。

ACTジャパンフォーラムが一度に支えられる人数には限りがあります。それでも、通常の支援が届かない人、制度や情報の隙間で取り残されてしまう人に、こちらから手を伸ばすことはできます。物資を届けて終わるのではなく、地域の団体と協力しながら、個々の事情に応じた細やかなケアを中長期にわたって支えることを大切にしています。

このため、ACTジャパンフォーラムでは熊本地震のための緊急募金を開始します。振込口座は下記のとおりです。また、ご送金の際には、お手数ですがQRコードのフォームから必要事項の記入を併せてお願いいたします。

**（藤守義光　ふじもり・よしみつ＝ACTジャパンフォーラム事務局）**

actalliance JAPAN FORUM

ACT ジャパンフォーラム　ホームページ https://ncc-j.org/actjapanforum/　Email actjapanforum@ncc-j.org
三菱 UFJ 銀行　高田馬場支店　普通 2255233

## 欧州の神学生４人が来日 宗教間対話学ぶISJP開幕

ISJP（Interreligious Studies in Japan Program）は、神学・宗教学を学ぶヨーロッパの学生を対象とした、NCC宗教研究所による３カ月間の交換留学プログラムです。日本の宗教について学ぶだけでなく、宗教が多様な世界でキリスト教徒として生きることや、ほかの宗教を信じる人たちと対話することについて学び、考えます。

2026年のプログラムは、９月28日にオリエンテーションと開会のあいさつから正式に始まりました。岩野祐介所長と、ドイツから来たEMS（Evangelical Mission in Solidarity、連帯福音宣教会）の国際ディレクター、ハン・カンヒー氏があいさつしました。

今年は４人の学生が参加しています。スウェーデンのルンド大学からDaniel Berglund氏とMichel Starco氏、ウプサラ神学セミナリーからMåns Wieland氏、ドイツのアウグスターナ大学ノイエンデッテルザウからLuise Kink氏です。

応募理由について、Berglund氏は「以前から日本の文化に興味があり、以前の参加者からこのプログラムを勧められました。日本について学びながら、精神的にも学問的にも成長できると思い、応募しました」と話しています。Starco氏は「日本の宗教生活についての理解を広げたいと思い、応募しました」と話しています。

日本での目標について、Starco氏は「日本でのキリスト教の役割や、仏教、神道、キリスト教が自分自身の考え方に与える影響について、もっと深く理解したい」、Berglund氏は「日本のキリスト教の歴史や、多様な宗教が人々の考え方に与える影響について学びたいです。そして、この旅を通して、自分が人生で何を大切にしたいのかを考えたいです」と語っています。

運営スタッフの私たちは、４人の学生を日本に迎えることができ、とてもうれしく思っています。毎年、参加者は新しい考えや質問を持ってきてくれます。それは私たち教師にとっても、とても大切な学びになります。

プログラムは12月18日まで続きます。これから４人が日本でどのような経験をし、何を学ぶのかを楽しみにしています。**（エスベン・ペーターセン＝NCC宗教研究所副所長）**

NCC 宗教研究所　ホームページ https://nccisjpnew.wixsite.com/nccisjp　Facebook　NCC Center for the Study of Japanese Religions (Kyoto)
T/F 075-366-2421　Email studycen@mbox.kyoto-inet.or.jp　郵便振替 01060-6-2555